

紀要

■『紀要』刊行30周年記念号

- 縄文時代初頭の移動とルートについて…………… 重田 勉 (1)
- 近江地域のカマド形土器
—渡来系集団の動向把握にむけて— …………… 辻川 哲朗 (6)
- 出土文字資料に近江古代史を求めて
—付表「滋賀県下の発掘調査で検出した地震跡」— …………… 濱 修 (18)
- 正倉院文書に見える三雲寺の所在地について…………… 小松 葉子 (26)
- 奈良時代の地域開発と神社本殿
—蒲生野・金貝遺跡の調査成果から— …………… 中村 智孝 (39)
- 近江における瓦器の基礎的研究…………… 堀 真人 (50)
- 安土城の空間特性 —安土城は神社だ— …………… 大沼 芳幸 (67)
- 高島郡における山城の築城画期 …………… 小林 裕季 (75)
- 将棋史研究ノート8 —歩兵の存在感— …………… 三宅 弘 (84)
- 研究ノート 近代化の痕跡
—彦根市松原内湖遺跡の鉄道遺構・遺物— …………… 小島 孝修 (89)
- 琵琶湖地域における人と森の相互関係史の解明に向けて
—滋賀県の遺跡における古生態学データの集成— ……………
林 竜馬・佐々木 尚子・瀬口 真司 (97)

30

縄文時代初頭の移動とルートについて

重田 勉

1. はじめに

探検家でもあり人類学者・外科医である関野吉晴氏は、人類発祥の地・タンザニアから到達地点の南アメリカのチリナバリノ島までの50,000kmを旅した。その旅の記録は「THE GREAT JOURNEY」として、全8回にわたりテレビ放映された。この壮大旅は、テレビ番組の企画や個人的な旅行では終わらない、人類の足跡を積極的に辿ろうとしたフィールドワークとして高く評価したい。

考古学では遺跡間の物理的な関係を検討し、当時の社会や生活に接近することが試みられる。例えば、遺跡Aの土器の文様は、遺跡Bの土器にもみられたならば、遺跡Bは遺跡Aの影響下にある、あるいは遺跡Aと遺跡Bは共通する文様の文化圏などの解釈が加えられる。ここからさらに復元的な試みをするならば、遺跡Aと遺跡Bには両者を結ぶ道があると考えられるだろう。遠隔地の遺跡との共通性があれば、さらに広域な道を想定し得よう。しかし、このような道としての遺構は確認し難い。東山道のような整備されたといわれる道でも、遺構としては捉えにくいので、旧石器時代や縄文時代の道などはほぼ確認できないだろう。

一方、モノや技術が通る道、すなわちルートは想定域は出ないが復元できるかもしれない。本稿は相谷熊原遺跡を中心とした縄文草創期の遺跡を参考に、環境の激変とともに生活形態が大きく変化した氷河期末頃の人々の生活、特に移動の様子に近づこうとするものである。

2. ルート想定のための視点

縄文時代の議論の中で、定住化が重視されることが多い。これは先の旧石器時代が遊動生活であり、比較する上でも重要な要素であるからだろう。旧石器時代と縄文時代の違いといえば、土器をはじめとした遺物組成の違いのほか、住居遺構の有無にある。旧石器時代でも堅穴建物と考えられる遺構は確認されているが、非常に少ない。縄文時代草創期に至り、堅穴建物は増加し、定住化の兆しはみえるものの、早期以降と比べると少ない。

相谷熊原遺跡では大きく深い堅穴建物が5棟出土したが、埋土の堆積状況や遺物の出土状況、遺構底面に残された柱穴と考えられる多数の小穴から、堅穴建物は断続的に複数回利用された可能性があるとした（松室・重田2014）。これは堅穴建物の位置関係などからの解釈だけでなく、在地産石材の利用と、補間的に遠隔地産石材を利用するという石器の石材構成も含めた見解である。

以上のように、遺構の構造だけでは人々の生活に迫れる

ものではない。立派な居住遺構があるからといって、一生そこにいるとは限らない。遺構・遺物と合わせて彼らの行動の軌跡を読み取る必要がある。

数ある事実から真実に近づこうとするのが考古学であるが、完璧に真実に辿り着くことはできないかもしれない。辿り着いていても、それを確かめる術はない。真実にどこまで近づけるかは分からないが、遺構・遺物の分析や検討を行わず、根拠が明瞭でなく論理的ではない想定は、単なる妄想に過ぎないので、①石器石材・②遺跡の位置と立地・③地形・④生業の4つの視点から移動ルートの想定を試みたい。

①石器石材の視点から

相谷熊原遺跡の5棟の堅穴建物からは多量の剥片石器が出土したが、石材の構成に特徴がある。最も多いのはチャート、次いで下呂石、最も少ないのがサヌカイトである。このような石材構成から考えられるのは、在地産のチャートを主として、補間的に下呂石とサヌカイトを用いる傾向が強いことである。下呂石とサヌカイトをどのような経緯で入手したかであるが、一つは他の集団と接触して入手したこと、一つは直接採取に赴いたことが考えられよう。石材構成のみを見ると両者とも可能性があるため、遺構の特徴を合わせて考える必要がある。5棟の堅穴建物の底面では多数の柱穴と考えられる小穴が検出されたが、埋土中の遺物の包含状況と合わせて考えた結果、断続的に複数回使用された結果の累積による可能性があるとしたのは先に述べた。石材構成が示すのは、補間的に用いられた石材獲得地との間を回帰的に遊動する居住形態と考えられ、このような石材構成は他の草創期後半の遺跡にもみられる。長野県お宮の森裏遺跡の石材構成も在地産石材を主に使用しながら補間的に遠隔地石材を使用している（新谷ほか1995）。

以上のように遺構の特徴や石材構成から、回帰的遊動生活という生活形態が想定される。同時に在地産石材獲得地と補間的に用いる遠隔地石材の獲得地との間に道の存在が浮かび上がる。この道は両者をつなぐ広域にわたる道であり、大まかに直線的にしか捉えられない。具体的な経路は他の要素も含めて考えていく必要がある。

②遺跡の位置と立地の視点から

具体的な道の存在は、同時期か近い時期の遺跡の位置と立地から導き出す必要がある。調査で確認される縄文集落跡は放棄された状態であるが、一時期のものとは限らない。重複して検出される住居跡には、ほぼ同時期のものや時期差・時間差が認められる場合がある。これは建て替えを繰

り返しているわけではあるが、居住民が死に絶えて廃絶したとは限らない。見方を変えれば断続的に集落が営まれているわけであり、土地への定着性が低い集団が回帰的に移動した結果の累積とも考えられる（大野2011）。低い定着性には、常に移動が伴っており、移動先にもあてがえないわけではなく、活動領域内での移動であったことだろう。移動の契機となるには、資源利用などの様々な要因が考えられる。そしてここにも道の存在が見えてくる。活動領域内の集落間を結ぶ道の存在である。集落間の道が連続的に確認できれば、直線的にしか結べない広域をつなぐ道の具体的な姿が見えてくるかもしれない。

③氷河期末頃の地形の視点から

縄文時代初頭は氷河期の終わり頃に当たる。氷河期は現在とは異なる気候である。特に海水面が現在とは大きく異なる。旧石器時代の終わり頃では現在より140mほど低かったといわれ、縄文草創期、隆起線文系土器群の時期の温暖化から海水面は上昇し、6000年前頃には現在と変わらないほどになったとされる（大上ほか2009）。海水面の上昇は、気温の上昇とともに山地にあった氷が溶融し、海へ流れ注ぐことで起こり、山間地から平野部へかけて多かれ少なかれ影響を及ぼすことになる。それまで山間地から遠かった海岸線が山地に近づくことになるので、氷河期の乾燥した平野部の草原の景観は次第に湿潤化していったであろう。数百万年の堆積から成る濃尾平野は、海水面の上昇により、現在の海岸線よりも、さらに10kmほど内陸まで海水が浸入していたことが、濃尾平野のボーリング調査結果から想定されている（大上2009）。

氷河期末の地球規模の気候変動からは道の存在は見出せないが、道の位置が歩行にはやや不安定な海岸線や河口付近よりも、安定した山地寄りになる可能性はある。縄文草創期の遺跡分布が山寄りにあるのも、生業との関係のほか、地形や地質も関わってくるのかもしれない。

④氷河期末頃の生業の視点から

縄文草創期の石器の特色として、石鏃の出現が挙げられる。それまでの尖頭器よりもはるかに小振りな狩猟具の登場である。隆起線文系土器群の頃には平基三角鏃が主流となり、草創期後半の爪形文系土器群の頃には長脚鏃という非常に特長ある形状の石鏃が出現する。相谷熊原遺跡からも出土しており、三重県西江野A遺跡や奈良県桐山和田遺跡などの周辺遺跡からも出土している。このような分布状況は、長脚鏃そのものを携えた集団、あるいは製作技術を備えた集団が拡散していったことを示している。最も多くの長脚鏃が確認されているのは長野県曾根遺跡であり、ここから拡散していった可能性がある。このような特長ある遺物の出土地点をつなぐことにより、かなり広域にわたるルートの存在を推定することができる。

ところで、石鏃の出現は、氷河期末頃の急激な温暖化により植生が変化し、大型ほ乳類が激減し、中型ほ乳類が増

加したことにより、狩猟方法を変えたことによるものといわれる。大型ほ乳類はマンモスやオオツノジカなどであり、主に平野部に広がっていた草原を活動域とする。中型ほ乳類は雑食性が強いイノシシや、樹皮なども食するシカなどである。彼らの行動と食生活から、山間地に生息地することとなる。激変する環境下を生き抜いた人々もまた、貴重なたんばく源の中型ほ乳類確保のため石鏃という狩猟具を開発し、山間地や山裾付近に居住と活動域を選んだものと考えられる。縄文草創期後半の遺跡が山間地や山裾に立地するのも、環境変化に適応した結果なのかもしれない。このような生業と深く関わる遺跡の分布は、②の視点とも関係する。狩猟を初めとした山資源の利用は、資源の収奪行為でもあり、その地に留まる集団の数や長期間の利用によっては、瞬間に資源は枯渇してしまう。これを防ぐには栽培や飼育を行うか、居留期間を定めて定期的に移動し、資源が再生するのを待つしかない。縄文草創期に栽培や飼育の事例は未だ確認されていないことから、後者の行動が選択されていたと考えられる。②に挙げた低い定着性と回帰的な遊動生活は、資源の枯渇を防ぐためと考える。時代は全く違うが、同じく山資源を利用する人々として、木地師集団にも良く似た行動がみられる。平安時代、現在の東近江の永源寺小椋谷に端を発した木地師は、やがて良質の木を求めて各地へ拡散していった。江戸時代の南会津では木地師集落内の戸数は20戸に限られていたとされ、20戸を越えそうになると村を出る家族があったとされる。また、木地師家族は一ヶ所の地に留まって一生を終えるわけではなく、不定期の間隔で移動していたとされる。居住期間は数年から数十年と規則性はない⁽¹⁾。山資源を利用するという点では、縄文時代に近い行動と思われ、資源の枯渇を防ぐための、木地師の暗黙のルールがあったのかもしれない。縄文草創期の生活にも何らかの暗黙のルールがあったのだろう。そうでなければ氷河期末頃の未曾有の温暖化や寒の戻りなどの環境変化に適応できず、生き延びることはできなかったであろう。

生業からは具体的な移動の「道」の存在はみえないかもしれない。見えるのは狩猟や採集の道であろう。しかし、①から③の視点と合わせて考えれば、その姿と成り立ちはみえてくる。

3. 相谷熊原遺跡の集団が移動したルートの想定

①から④の視点を合わせて、縄文時代初頭のルートを想定してみよう。ここでは①で述べた石材組成からみえる相谷熊原遺跡の集団の移動ルートを想定してみる。相谷熊原遺跡から出土した石器石材はチャート・下呂石・サヌカイトである。回帰的遊動生活であったならば、各石材が獲得できる地を移動していったことになる。各石材の比率からみれば、相谷に来る前には下呂石獲得地におり、移動に先駆けて採取し、相谷の地に至るまでにある程度消費したこと

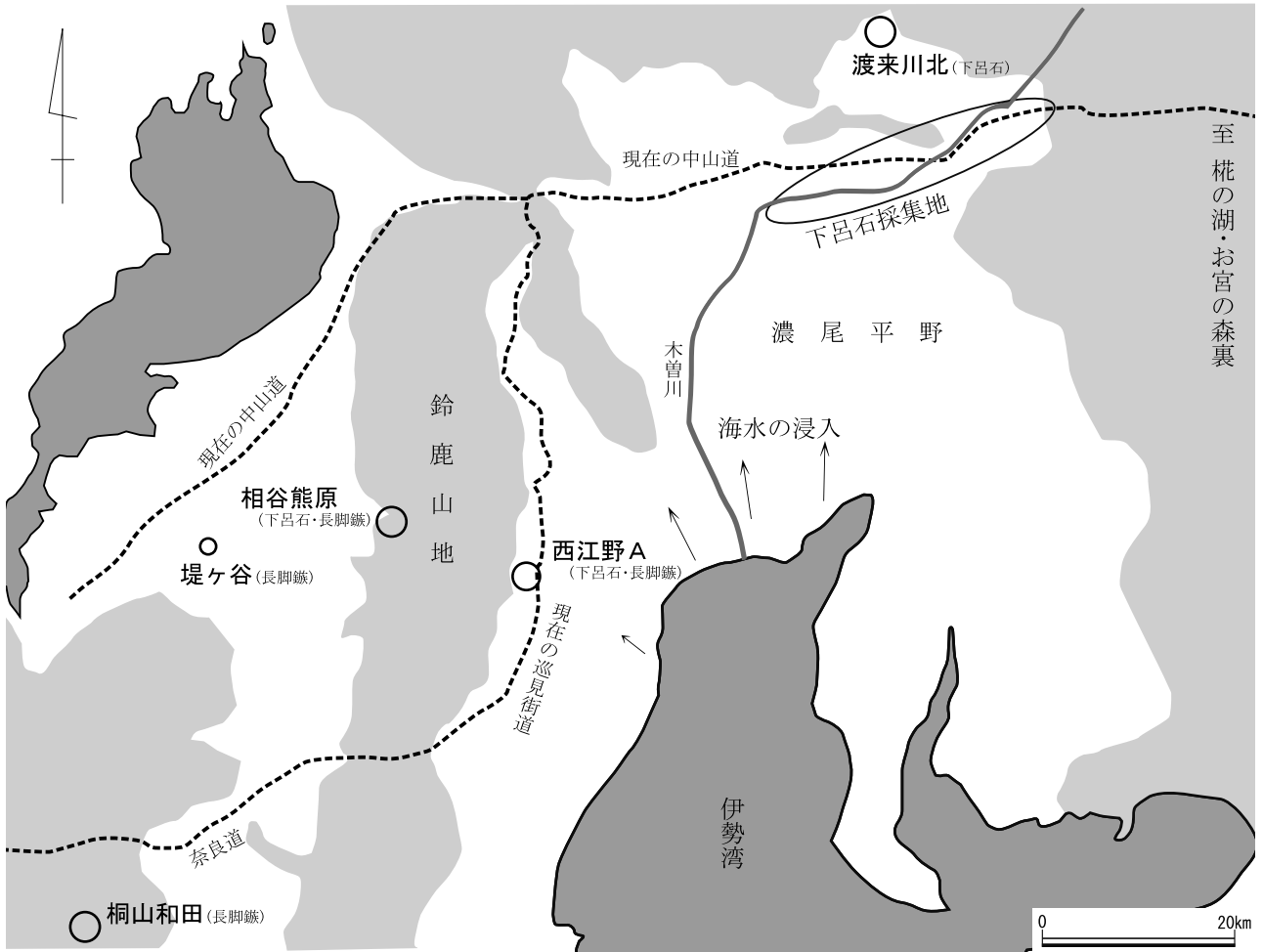


図1 縄文草創期遺跡の分布と現在に残る道

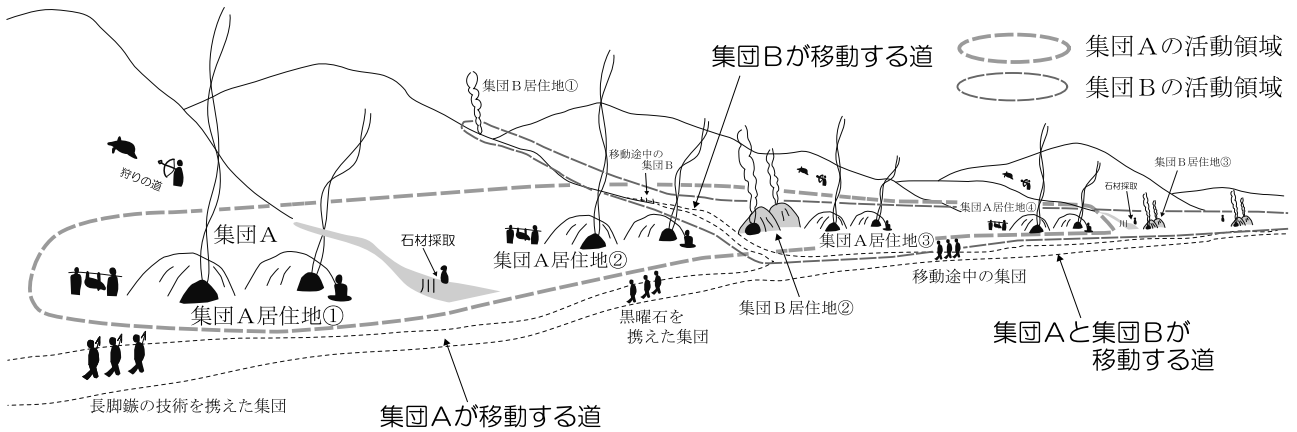


図2 集団と道の関係模式図

になる。下呂石の採取地点は、自然面の衝撃痕の様子などから、現在の美濃加茂市から川島町付近の川原と考えられる（齋藤2005・中村2007）。このあたりには視点②や④のような山裾や山間地があり、関市渡来川北遺跡などがある。相谷熊原遺跡の集団と直接関係するかは分からないが、下呂石採取地点に近いことは興味深い。渡来川北遺跡の出土石器には、一定量の下呂石が含まれており、相谷熊原遺跡の集団と同様に、在地産石材を主に使いながら、補間的に遠隔地石材を使う、回帰的遊動生活を行う集団だったのかもしれない。

下呂石のような遠隔地石材に着目すれば、三重県西江野A遺跡の存在は重要である。確認できるチャートと下呂石の比率は相谷熊原遺跡と近いものがあるほか、サヌカイトや黒曜石も含まれているようだ⁽²⁾。単純にチャート・下呂石獲得地間を移動するだけでなく、サヌカイトや黒曜石を携えた集団が移動していく道沿いに位置していたことを思わせる遺跡である。さらに石鏃には長脚鏃も含まれており、石材と技術が移動していく広域をつなぐルートの存在を想定できる。さらに南へ行くと、奈良県桐山和田遺跡がある。大和高原に位置する縄文草創期の遺跡であり、サヌカイトを主たる石材として用いる。黒曜石などの遠隔地石材も若干量出土しており、長脚鏃もある。おそらく桐山和田遺跡も石材と技術が移動していく広域をつなぐルート沿いに位置しているのだろう。

このような同様の石材構成の遺跡の位置をつなぐだけでも、おぼろげながらルートはみえてくるが、上記の③や④の視点を加えれば、さらに具体的にみえるかもしれない。③で述べたように、最大で140m低かった海水面は、氷河期末頃の急激な温暖化とともに上昇していった。濃尾平野にはかなり内陸まで海水が浸入しやすい状況であり、地形や土質は変わりやすい状態にあったかもしれない。一方、急激な温暖化により貴重なたんぱく源となる動物の生息地が山間地にあったことにより、居住域も山裾や山間地へ移った。集団の活動領域は山へと移行した。従って、様々な活動領域は山間地が中心となり、各集団の集落や活動領域を結ぶ道も山裾や山間地が主となったであろう。

以上の視点からみると、美濃山地南麓から鈴鹿山地東麓には、技術と石材が移動していく広域のルートを想定できる（図1）。後世の道である中山道（東山道）→巡見街道→加太越奈良道などは、古くからある広域ルートを踏襲しているのかもしれない。

相谷熊原遺跡は鈴鹿山地の西麓にあるので、東麓の道とはやや離れた位置だが、石材構成や長脚鏃という特定器種を携えていることなどから、鈴鹿山地東麓の広域ルートを使って移動し、一山越えて相谷の地に至ったのかもしれない。現在の視点で見れば、1000m級の山々は伊勢と近江の往来を阻む障壁にしかみえないが、山間地を活動域としていた人々にとっては何ら問題ないことだったのかもしれない。あ

るいは鈴鹿山地東麓とは反対側のルートとして鈴鹿山地西麓のルートがあり、これを經由して相谷の地に至った可能性もある⁽³⁾。

相谷熊原遺跡から下呂石獲得地までは、関ヶ原を經由して鈴鹿山地の麓に沿って移動しても110kmほどの距離があり、かなり広域にわたる活動領域をもった集団であったと考えられる。広域な活動領域内には広域な範囲をつなぐ道の存在があり、広域な活動領域をもつ集団が複数あれば、より広域間をつなぐ道ができていく。これら集団の活動領域の道がつながっていくことにより、やがて長距離移動のルートとなっていくと考える（図2）。

4. おわりに

多くの人が歩けば道になるので、道やルートが存在したことは想定できるが、明確な痕跡がみえないものなので推測の域を出るのは難しい。出土遺物や検出遺構の詳細な観察が重要なのはいうまでもないが、限界があるのも確かである。冒頭に挙げた関野吉晴氏のグレートジャーニーや、齋藤基生・中村由克の石材調査などは、積極的なフィールドワークにより、机上の研究ではみえない、先人たちの行動を復元でき得る成果を導き出した。今回掲げた「道」や「ルート」の研究についても、現地へ赴き、フィールドワークを行いながら研究を進めていきたいと考えている。多分に感覚的な分析となるかもしれないが、より彼らの生活に接近できるよう努めたい。

註

- (1) 龍谷大学里山研究センター第6回研究会 須藤 護「木地師の移住と離村との相互関係」より
- (2) 筆者の実見による。
- (3) 近年調査が行われた竜王町堤ヶ谷遺跡では、谷の堆積層からチャート製の長脚鏃が出土した（重田・横田2017）。また、近隣の遺跡から有茎尖頭器が出土しており、縄文草創期の活動痕跡が確認できる。

挿図典拠

- 図1 重田作成
図2 重田作成

文献（著者名・機関名50音順、刊行年順）

- 大上 隆・須貝俊彦・藤原 治・山口正秋・笹尾英嗣（2009）「ボーリングコア解析とC(14)年代測定に基づく木曾川デルタの形成プロセス」『地学雑誌』118-4、東京地学協会
- 大野 薫（2011）「縄文集落の弱定着性と回帰的居住」『季刊考古学』第114号、雄山閣
- 及川 穰（2003）「出現期石鏃の形式変遷と地域的展開—中部高地における黒曜石利用の視点から—」『黒曜石文化研究』2、明治

大学人文科学研究所

及川 穰(2015)「石器に見る生活の変化(2)西日本」『季刊考古学』
第132号、雄山閣

額 額 茂(2011)「縄文集落における移動の問題」『季刊考古学』第
114号、雄山閣

齊藤基生(2005)「下呂石の動き」『地域と文化の考古学』I、明治
大学考古学研究室

重田 勉・横田洋三(2017)『堤ヶ谷遺跡』(滋賀竜王工業団地造成
工事に伴い発掘調査報告書) 滋賀県教育委員会・(公財)滋賀県
文化財保護協会

田村 隆(2010)「石器石材の需給と集団関係」『講座日本の考古
学』2(旧石器時代(下))、青木書店

中村由克(2007)「下呂石の供給」『縄文時代の考古学』6、同成社
松室孝樹・重田 勉(2014)『相谷熊原遺跡I』(農地環境整備事業
関係遺跡発掘調査報告書1) 滋賀県教育委員会・(公財)滋賀県
文化財保護協会

新谷和孝・神村 透・村田広司・角張淳一・渡辺 誠(1995)『お
宮の森裏遺跡発掘調査報告書』(一般国道19号上松バイパス建設
工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書)上松町教育委員会・
建設省飯田国道事務所・木曾郡町村会

(しげた つとむ: 調査課 副主幹)

【編集後記】

当協会は、〈文化財をとおして地域に力強く貢献していくこと〉を組織の使命に掲げ、その基盤となる調査・研究能力を向上させ、その蓄積を形にしていくための場として『紀要』を位置付けてきました。今回、ここに30個目の結晶をお届けいたします。

本号では、縄文・古墳に関わる諸問題のほか、古代の地域の開発、瓦器の基礎的研究、戦国の城の位置づけ、さらには将棋や鉄道にまつわる歴史、人と森との関係史などが検討され、調査の過程で生まれた多様な課題に取り組む職員・関係者の姿を反映させるものとなりました。

地域と関係機関の協力の下に実施できた調査成果を適正に活かすため、更なる研鑽に励んで参ります。今後も皆様のご批判とご教導をあらためてお願いいたします。 (S.S)

紀要 第30号

刊行年月日：平成29年（2017）3月31日

編集・発行：公益財団法人滋賀県文化財保護協会

520-2122 滋賀県大津市瀬田南大萱町1732-2

(tel) 077-548-9780 / (fax) 077-543-1525

(e-mail) mail@shiga-bunkazai.jp

<http://www.shiga-bunkazai.jp/>

印刷・製本：三星商事印刷株式会社